



洛風だより・ほかほか通信 ～保護者のみなさまへ～

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

冬休み中に、洛友中学校との冬季合同研修会が行われました。立命館大学の中鹿直樹先生による「行動分析学の考え方や見方についての紹介～特別支援学校の生徒さんを対象としたいいくつかの事例を通じた支援の実際～」をテーマにしたお話を聴かせていただきました。「行動分析学」というと難しいお話かなと思っていたのですが、学校だけでなく、普段の暮らしの中でもとても役に立つお話でした。印象に残った言葉を紹介します。

すべての「できる」には、援助が付いています 人の行動は、「手段・工夫」があればこそ、 「できている」が成り立つのです

☆障害のせいで「できない」とされていることをどのような支援があれば「できる」となるのかを考える、やってみる、示してみる。その人にどのような工夫された手段やフィットした環境があれば、最大限の能力を発揮できるのかということを、起こっている現象や事実をもとに検証していくことが行動分析学の考え方です。

☆健常者の人間は一人ですることができるというのが「自立」に見えているけれど、実はたくさんの選択肢（使える手段）を選んで利用しているだけなのです。

例えば、車いす生活の方は、エレベーターが壊れたら、自力で上ることも降りることもできない。健常な人間はそれに代わる階段という手段を選択できる。しかし、エレベーターも階段も自分で作った手段ではない、誰かが用意してくれた環境があるだけです。

他立的自律…「～があれば、何とかなる」 援助があれば自分でできる環境・関係が大事

ふだん私たちは「自立的自律」、「何でも自分でできなければ、こうでなければ」と考えて生活しています。その考えは、ともすれば、「みんな同じことができなければならない」「人との違いやできなことがあってはならない」という思いに陥ってしまうことがあります。それはしんどいことではないでしょうか。

「他立的自律」と聞けば、他人任せのようですが、大切なのは「自律」できることです。
自分で何とかなることを決められる、できることを増やしていけることです。

この考え方は、本校の「仲間とともに、納得して学び直す、心を開いて遊び語り合う 自信を取り戻す 学習の実践」にも通じることです。

納得して自分でチャレンジできる環境をつくる 「試させてみる」「待ってみる」 そして、うまくできたことを認める

必要な「手助け」を知るためには、試してみなくてはなりません。失敗を経験できる環境、寛容さが大切になります。洛風が大切にしている「誰もが心地をよいと感じる風」は、居心地の良さではなく、安心して、納得してチャレンジできる風です。

五郎丸選手にも、羽生選手にも、澤選手にも、あるいはノーベル賞の梶田さんや大村さんにも必ず援助してくれるコーチや同僚がいます。とても多くのチャレンジ・失敗を経験しています。失敗しない人、人の援助を必要としない人は一人もいないはずですね。